

実を結んださくらんぼの木

愛知県 一宮市立中部中学校 1年

豊島 湊 (とよしま みなと)

ぼくが小学校に入学した時、家の庭にさくらんぼの木を一本植えた。ぼくの住む一宮市は毎年小学一年生にお祝いで入学記念樹をくれるからだ。庭のさくらんぼの木は、毎年花は咲くけれど、実がなることは一度もなかった。「なぜだろう？」と調べてみると、さくらんぼの木は一本では受粉ができず異なる品種を二本以上近くに植えることで実をつけることができるという書かれてあった。自分の木だけでは実をつけることができない事を知り、「もういいや。」と残念な思いと、あきらめに変わっていった。ところが、昨年ぼくの大きく育ったさくらんぼの木の横に新しく一本の小さな木が仲間入りした。五才離れた弟の入学記念樹だ。それは、品種の異なる木だった。

ぼくの弟は、生まれた時から発達がゆっくりで言葉がたくさんでるようになったのも、歩き始めたのも二才になってからだった。まわりの友達の弟や妹と比べると少しおそいなと思うことがあったが、両親も弟の事を「ゆっくりさん」と言っていたので、ぼくも「ゆっくりさん」なんだと思い深く考えていなかった。ところが、ぼくが小学五年生になった頃両親が自分の小学校の教頭先生と来年入学する弟の就学相談をこまめにする様になった。何を話しているのか不安になり聞いてみるとこう言った。「特別支援学級に入るかもしれない。」と。ぼくは、頭が真っ白になった。そして、「普通なのになんで？」と言った。わけが分からないあせる気持ちがどんどん高まり、「一年生は勉強も難しくないから、大丈夫。」「一年生はみんなフラフラしてるよ。」など、普通学級でも大丈夫という思いを伝えた。話を聞いていた両親はこう言った。「一番大事なものは弟が生き生きと学べる場所をじっくりと考えることだと思う。特別支援学級がどんな場所なのか知らないから不安になる気持ちも分かる。自分の目でこれから特別支援学級がどんな場所でどんな活動をしているのか見てほしい。そして見た事、感じた事を教えてほしい。」と。

「教えてほしい。」その言葉にとっても大きな頼み事をされた気分になったが、不思議と嫌ではなかった。それは、多分自分自身も「知らない」ことにおびえていたからだ。こういう機会があるまで自分の小学校の中にある特別支援学級という場所がどんな所なのかよく知らなかった。その日から、ぼくは学校生活を送りながら下を通る時も、校庭にいる時も注意深く特別支援学級の活動を見るようになった。そして日々見ていく中で色々な事を知った。「勉強をあまりしていない、テストがない、宿題もない、人との交流が少ない。」と勝手にいだいてい

たイメージはみごとに外れた。勉強は普通学級のように一齐に何かを学ぶのではなく、一人一人の特性に合わせてじっくり学びを進めていた。そのためテストはないのではなく、一人一人の学びのタイミングでしているという事も知った。宿題は、全員が同じものではなく、個人に合わせて毎日出ている事も知った。野菜を育てたり収穫している姿も見たことがあったがそれは、生活科と食育の勉強だということも分かった。そして何よりも、人との関わりが少ないと思っていたが、一人一人のペースで普通学級の授業に行ったり、給食に参加したりと壁がないことも学んだ。見えない壁を作っていたのは、自分自身の心だったことにも気づいた。

いよいよ弟が入学する頃、はっきりとこう感じた。「特別支援学級は、弟が学校生活を生き生きと楽しめる所なんだ。」と。

ぼくの心は一步前進した様感じた。弟が入学してからは、ますます特別支援学級が身近なものになっていった。弟は毎日喜んで登校することができた。そんな姿を見ながら自分もカッコいい姿を見せたいと思い児童会活動や勉強を頑張る事ができた。時には友人から「お前の弟普通じゃないの？」と言われる事もあったが、そのたびにこう伝えた。「発達がゆっくりだからていねいに勉強をしているんだ。」とほとんどの友人は「そうなんだ。」とあっさりと受け入れてくれた。そして、「普通」という言葉の意味についても深く考えるようになった。「普通」その言葉だけで人を簡単に分けることは決してできないと。

庭に植えてから六年間一度も実がならなかったぼくのさくらんぼの木。その横に、弟のさくらんぼの木が並んだ。その次の春、見事に実をつけることができた。「人はたった一人では実をつけることはできない。」隣にいる誰かの大切さに気づいて、その人の事を知ろうと努力した時、初めて実を結ぶんだと思う。そして、その気持ちこそが世の中にある全てのへん見や差別を取り除く力になるんだと感じた。また、「知る」だけではなく、「知っている」ことを知らない誰かに自分の言葉で伝える勇気も大切なのだと学んだ。

